

翻訳 董群廉著「呂紀葆（寒川）インタビュー録」

－2010年5月6日に董群廉氏によって実施されたシンガポール金門会館における呂紀葆（寒川）へのインタビュー録。『金門郷僑訪談録（八）【獅城、檳城篇】』、台湾出版、2010年12月に「呂紀葆先生訪談記録」として掲載－

The Interview with Mr. Loo Kee Pow (Han Chuan)

合田 美穂 藤田 依久子 高城 佳那
Miho GODA Ikuko FUJITA Kana TAKAGI

(平成25年10月14日受理)

はじめに：翻訳にあたって

このたび、本原稿を翻訳することに至った学術的意義は、大きく分けて3点ある。まずは、本原稿の呂紀葆（寒川）氏は、東南アジアを代表する華文作家でありまた詩人でもある人物で、多くの著作および詩を残しており、東南アジアの華文界では高い知名度を有している人物であることである。日本では、中国語による文学作品や詩に関しては、主に中国大陆や台湾のものがよく紹介されており、作家や詩人も中国出身者が注目される傾向が強く、それ以外の地域の華文作家または詩人、および彼らの作品は日本ではほとんど紹介されていない。そのため、この人物を日本に紹介することで、東南アジアの華文作品および詩についての理解と認識をもたらすという意義がある。

2番目の意義は、呂氏の背景に関するものである。本原稿の中でも言及されているが、呂氏は、典型的な20世紀における海外華人移民の家庭に生まれ育っている。19世紀末期から20世紀初期にかけて、中国華南地域から、多くの華人が東南アジア全域に移住し、その後、定住することになった。そういった華人移民の後裔が国民の約7割を占めている国家がシンガポールである。呂氏の自伝的な色彩が強い本原稿を通して、東南アジアの華人移民の歴史や社会、ひいては現在の東南アジア華人のアイデンティティ問題などを理解することに、大きな意義をもたらすと考えたからである。

3番目の意義は、この翻訳をすることに至った最大の理由であるともいえるが、呂氏のインドネシア華人社会に対する多大な貢献という国際関係における意義である。呂氏は、中国語の使用および中国語による諸活動が30年以上厳しく禁止されていたインドネシアにおいて、インドネシアの華文作家や詩人たちのために、華文書籍や詩集を水面下で提供したり、彼らの作品の活字化の機会をシンガポールにおいて作ったりするなどして、インドネシア華人の作家あるいは詩人としての活動を陰で支えてきた人物である。特に、1998年に台北で開催された第3回世界華文作家大会において、呂氏は、リスクを顧みず、同年5月にインドネシアで発生した排華暴動によって甚大な被害を受けたインドネシア華人たちのために、インドネシアの排華暴動を厳しく批判し、それをきっかけに、世界中の華文作家たちを動かし、国連人権委員会に対して、インドネシア政府がインドネシア華人の公民権、生命、財産を保障することを要求する動きに至った。一步違えば、この呂氏の行動は、

インドネシア政府からの抗議の対象となっていた可能性もあり、この行動のリスクは非常に高いものであった。呂氏のインドネシア華人の人権を守るために取った行動は賞賛に値するといえ、当時、排華暴動の起こったインドネシアの至近にあるシンガポールにおいて、報道や逃れてきたインドネシア華人の声などを通して、排華暴動の悲惨さを目の当たりにしていた訳者は、呂氏の勇気ある行動に心打たれたのであった。その後、呂氏は、2004年にインドネシア華文学推進に対する貢献賞が、2010年12月にインドネシア華文学界から感謝状が贈られている。近年の東南アジアにおける国際関係を理解することにも、本稿は大きな意義をもたらすといえる。

加えて言えば、本稿の翻訳を決めたことには上述の3点の意義のほかに、訳者の個人的な理由もある。訳者は1996年から2001年にかけて、シンガポールにおいて研究活動に従事しており、呂氏とは研究活動を通して1996年に知り合い、その後の数年間、研究を通しての交流を続けた。呂氏は、本業である政府関連機関において仕事をする傍ら、作家および詩人としての活動のみならず、ボランティアで現地の文教活動、同郷会などの活動などにも精力的に携わっており、シンガポール社会にも大きく貢献していた。このたび翻訳をした原稿でも取り上げられているが、呂氏は、社会的地位を有し、多忙な生活を送っているにもかかわらず、家族との時間を最も大切に、また国籍を越えた知人や友人、作家仲間、時には突然訪ねてきた見知らぬ人物に対しても、公平に真摯に付き合いを続けていた。効率や合理性が要求され、人情や同情などが後回しになる傾向がますます高くなる現代都市社会において、呂氏とのかかわりを通して、人々が忘れてはいけないものは何かということを学ばせてもらったのである。

なお、呂氏の略歴は以下の通りである：シンガポール国籍で、シンガポールの著名な華文詩人。1950年に金門島にて生まれる。その後、シンガポールに移り、シンガポールにて教育を受ける（崇福小学校、南洋華僑中学、南洋大学を卒業）。その後、政府関連機関である人民協会に就職し、仕事の傍ら、作家および詩人としての活動、シンガポールでの文教活動、インドネシア華文界への支援などを続け、シンガポール社会ならびにインドネシア社会に対して多大な貢献を行った。シンガポールのメディアにも幾度も紹介されているほか、2004年にはインドネシア華文学推進に対する貢献賞、2010年12月にはインドネシア華文学界からの感謝状が贈られている。妻、2人の息子がいる。（訳者）

1. 家庭の背景

私は、1950年に金門島で、長男として誕生した。下には、弟が1人、妹が3人いた。私たちの親族が海外に出た時期はとても早く、父の叔父の世代は既に海外に出ていた。私の祖父は、5人兄弟であり、祖父は長男であったために家業を継いだ、2番目の大叔父と3番目の大叔父は、海外に出た。父方の一番上の伯父は、彼らに連れられて、海外に出たのである。祖父には3人の子がいた。一番上の伯父である呂承盤、2番目の伯父である呂承対、そして父の呂承法である。父の兄弟の中では、一番上の伯父が最も早く海外に出た。2番目の大叔父が、最初に伯父を連れて、マレーシアのムアール（Muar）に渡ったが、伯父はそこに馴染めず、その後、スマトラ島のバガンシアピアピ（Bagansiapiapi）に移った。バガンシアピアピは、かつては世界最大の漁場の1つであり、多くの金門出身者が暮

らしていた。しかし、伯父はそこにも馴染めず、その後、ブリトゥン島（Belitung Island）に移り、終生そこで暮らした。

ブリトゥンは、1つの小島ではあるものの、その面積はシンガポールの6倍もあり、スマトラ島南岸に面する島で、早くは錫鉱石の採掘が盛んであった。また中国からの苦力と呼ばれる労働移民が集まる場所でもあった。ここに売られてきた苦力の大半が、客家系中国人であったために、ここに居住する華人は、客家系が最も多く、福建系はその次に多かった。福建系中国人の中では、金門出身者が最も多く、金門系中国人のほとんどが、各自様々な場所を経て移ってきた者であった。一番上の伯父は、そこに落ち着いてから、小さな雑貨店を開き、ペンキや金物などを販売した。このほか、地元のインドネシア人漁師から魚を買い取り、塩漬けの干物にして、ペナン（訳者注：マレー半島西岸北部の島）に運搬し、それらはそこから伯父の2人の子によって、ジャワ各地に転売された。何年もの努力が実り、商売は順調で、良い生活を送ることができた。

金門の土地は痩せており、島民の生活は苦しく、一番上の伯父に続いて、2番目の伯父も島を出た。祖父は、飲酒量が多かったために、父が幼い頃に亡くなり、父は後ろ盾を無くして、学校に数年間通ったものの退学することとなった。郷里では、農耕によって生計を立てていたが、戦争に勝利してから結婚し、すぐに「兵役から逃れるために」シンガポールに渡った。

母は、1950年に私を出産した。1953年になると、父は、私たち母子のために、シンガポール渡航を申請してくれ、1954年3月に許可が下りて、1954年に母は私を連れて南に渡った。当時、私は5歳だった。軍用機で台北に渡り、台北で乗り換えてシンガポールに渡る途中で、シャム（現在のタイ）を経由したが、私はまだ小さかったために、その途中で香港に寄ったのか、マレーシアに寄ったのかもあやふやだった。私たちは、その年の7月か8月にシンガポールに到着し、父と合流した。当時、金門からシンガポールへ渡った人は多く、金門会館の理事である林長鏢や陳佳模（訳者注：2名ともにシンガポールの華人社会では名の知られた会社経営者）も当時渡ってきた人たちである。私たちがシンガポールに来て1、2年経ってから、弟が生まれた。続いて、3人の妹が生まれて、一家全員は楽しく暮らした。

私の父は、学があまり無かったために、シンガポールに来てからは、金僑友公会に身を寄せて、一緒に身を寄せ合っていた同郷人とともに、苦力として働いた。私の知るところでは、早期の多くの金門出身者の渡航者たちは、学がなかったために、陸上では、大半が苦力として肉体労働に従事し、海上では、船頭となって客や荷物を運搬していた。一部の教育を受けた者も同様であった。ただ、教育を受けた者は、比較的思慮深く、しばらく働いてから一定の資本や元手ができれば、商売を開始したり、数名の同郷人と店を開いて、その経営者になったりした。

私の父は、苦力となり、苦勞して金を得たが、収入は悪くなく、一家は不自由のない生活を送ることができた。同郷人に聞いた話によると、父は現場監督となり、1人で2人分の賃金を得ていたそうであった。しかし、実際にはそうではなかったようだ。もともとは、以前の現場監督は、父の従妹の夫であり、父はその手伝いをしていた。従妹の夫が早くに病気で亡くなり、子どもはまだ小さく、家庭も貧しかったため、彼らにとっての収入の重要性を父は感じて、自らの賃金の一部分を従妹に渡していたそうだ。私は、父の生前の友

人や同郷人と知り合う機会があったが、彼らはみな、父の人柄を評価しており、私は、いたく感動したものであった。

同郷人である林長鏢によると、私が幼い頃の我が家の生活は苦しいものであったそうだ。私の幼い頃の印象では、父は苦力ではあったものの、我が家は一度も貧しさを感じたことはなく、父は私たちにお腹をすかせることもなかった。私には中学、大学まで行かせてくれ、休暇にもアルバイトをする必要はなかった。私の母は、一度も外で働いたことはなく、彼女の言葉を借りれば、シンガポールに来てからは1セントも稼いだことはなかった。私の父は、当時、金は持つてはいなかったが、全く貧乏であるとはいえなかった。家計を逼迫させたことはなく、実際は「暮らしむきがまずまずの家」であった。

父は、かつては、シンガポール南方ゴム公司以、運搬の仕事を請け負っていた。その期間、本社は、マレーシアのクアラルンプールのゴム会社であった。ゴムがシンガポールに運ばれた後、父を含めた若くて力のある労働者、その大部分が親戚関係を頼って渡ってきた金門出身者であったが、彼らによって、ゴムの荷下ろしが行なわれていた。後に、父は、南成行公司という会社にて、運搬業務を請け負うようになった。南成行公司の主な取り扱い対象物品は、電池等の中国製品、取り次ぎの韓国の高麗人参であった。父は50歳を過ぎてからも、その会社で現場監督をしていたが、その時期になると、業務が機械に取って代わられていたために、運搬業務も辛いものではなかった。南成行公司の社長は、李嘉興であった。父によると、李は親しみやすく、社長らしくなく、従業員への態度もよくて、父に対しては友人のように接してくれ、父方の2番目の伯父もそこで働いた。1980年代になって、私の弟は高校を卒業し、兵役を終えてから、港務局で働いた。後に、李嘉興は、私の父に工場を管理する従業員を雇いたいと申し出て、父と私による話し合いを経て、私は弟がその仕事につくことを提案した。工場は後に閉鎖されて、弟は本社に異動となったが、社長の彼への信頼は厚く、給与も高く、更には彼の外出のために、ベンツまで支給してくれた。

2. 学生時代

1950～1960年代、私たち金門出身者の大半が、チャイナタウンのホッキェン・ストリート (Hokkien Street)、セシル・ストリート (Cecil Street)、テロックアヤ・ストリート (Telok Ayer Street)、ブントット・ストリート (Boon Tat Street) に居住していた。ここには、多くの福建出身者と金門出身者が居住しており、天后宮と呼ばれる廟が鎮座し、最も早い時期には、福建出身者が集まった場所でもあった。天后宮 (媽祖廟) は福建会館の前身であり、後に、資金が募られて福建会館となった。今の福建会館は、天后宮の向かいに位置するオフィスビルとなっている。

私は、6歳で就学年齢となり、崇福小学校に入学した。崇福小学校は、福建会館が設立した学校であり、以前は崇福女学校として女子のみを受け入れていたが、私が入学する時には既に男女共学となっていた。福建会館は、崇福のほかに、愛同、道南、光華の小学校4校と、南僑中学を合わせて、5校の学校を設立していた。崇福は評価が高い学校であり、現在もそれは同様である。私は、1962年までの6年間、そこで学んだ。前半の数年の成績は普通であったが、5、6年生になって、突然勉強の方法がわかって、学業成績は常に上

位3位に入るようになった。5年生では2位、6年生では3位であったが、他の2名はすべて女子だった。小学校では、一般的に女子は男子より勉強熱心であった。基本的に、勉強は私にとっては趣味であった。父は勉強しろとはやかましく言わなかったが、父のように学がないために肉体労働にしか就けないことにはならないように、ちゃんと勉強をするようにと諭されてはいた。

当時の勉強は、教科書の暗唱であり、覚えられないと教室に居残りになった。私は記憶力がよかったので、定刻どおりに下校することができた。1960年代は、電話が普及しておらず、電話代も高かったので、一般家庭では電話線を引いていなかった。私は、よく通報役を担わされ、放課後、同級生の家に行き、居残りになっている子どもの親に、逐一それを報告していた。幸いに、同級生はみな近所に居住しており、走り回ることは苦にはならなかった。そのほかに、私の中で印象深いことは、学校のそばに、本屋が2軒あり、またその近くに図書の貸し出しをする屋台があったことである。私は、お金を節約して本を買ったり、本を借りたりしていた。私が、後に、物を書くことが好きになったことと、子どもの頃に本を買ったり借りたりしたこととは大きく関係している。

小学校時代、一般の学科のほかに、体育もよくできた。私は、かつて学校の縄跳びグループの代表になったことがあり、また、羽蹴り（訳者注：穴開きの銭を数枚重ね、その穴に羽を挿し、銭の部分を布などでくるみ、足で蹴る遊び）もうまかった。左足でも右足でもでき、左右交互の足を使うこともできた。また、最も印象深いのが、1961年に陳嘉庚（訳者注：当時のシンガポール華人社会で最も影響力があったと言われる華人企業家で、教育事業へも大きく寄与した）が亡くなった時のことである。私と他のクラスの代表は、タングリ（Tangling）にある彼の豪邸での葬儀に参列し、列を成して頭を下げた。1962年に、1枚の大型の油絵が、私たちの学校の講堂中央に掲げられた。私たちの学校は6階建てであり、1階から4階の左右および前方が教室と事務室になっており、中央が講堂であった。当時は、小さかったために、その油絵の人物が陳嘉庚であることは知っていたものの、まだ彼の偉大さについては知らなかった。

小学校卒業時の統一試験後に、進学希望中学を申し出ることができ、教師は3つの中学校を推薦した。1つ目は華僑中学（訳者注：正式名称は南洋華僑中学）、2つ目は中正中学、3つ目は育英中学であり、当時父母はどの学校がいいのかも全くわからなかったために、私たちは教師の意見に従うことにして、教師の指示通りに、3校の校名を記入した。試験結果が発表されてから、私は、幸運にも華僑中学に受け入れられることとなった。クラスでは、華僑中学に受け入れられたのは私だけで、当時の全校生徒の中でも、華僑中学に受け入れられたのは4名以下だった。

華僑中学は、陳嘉庚が創立した学校であり、1955年（訳者注：正式には1956年）に南洋大学が創立されるまでは、「東南アジアの最高学府」との誉れが高い学校であり、シンガポール建国史上、多くの人材を輩出してきた学校であった。早い時期の在學生は、思想が過激であり、新中国に思いをはせていた。思想の違いによって、彼らは左派として一線を引かれていた。多くが自ら望んで、あるいは送還されて中国に渡り、彼らの多くが様々な領域において、傑出した存在となっていた。一方、シンガポールで副総理、そして最初の民選の大統領となった王鼎昌もまた華僑中学の卒業生であった。現在の華僑中学は、なおも名門校であり、近年もシンガポールの成績上位3校に入り続けている。輩出した人材は

数えきれず、大臣クラスの人物の中にも卒業生が多い。

1963年、私は華僑中学に入学した。同級生には様々な生徒がおり、裕福な者、貧乏な者もいた。親の中には、高級官僚、会社経営者もいれば、物売りや使用人、普通の労働階級の者もいた。裕福な家庭の者は、大きな車で送迎があり、運転手が校門で待機しており、午後授業が終わると子どもを乗せて帰宅した。郊外の村に居住している者もあり、毎日自転車で登校していた。私は、毎日路線バスに乗って通学していた。中学1年の時は、まだテロックアヤ・ストリートに住んでいたため、まず10分ほど歩いてラオパサ（Lau Pasat、訳者注：現在の地下鉄のラッフルズ・プレイス駅付近にある古くからのマーケット）の近くから、政府のバスに乗ってブキティマ・ロード（Bukit Timah Road）に出て、そこで緑色のバス会社のバスに乗り換えて学校に向かった。1967年に、ブキホースィー（Bukit Ho Swee）の公共住宅に引っ越してからも、2回バスに乗らなければならなかった。しかし、多くの同級生が同じ地区に居住していたため、同級生と登下校を共にすることができて、辛さは感じなかった。

私が入学したばかりの頃、多くの先輩が親切に関わってきた。私の1つの科目の成績が良くないからといって、彼らは無条件で補習を行なうと申し出てきた。その目的は、私を彼らの組織に取り込みたいことにあった。基本的に、当時の勉強は、すべて問題なかった。また、私が華僑中学に入学が決まった際に、私の父の従兄弟に当たる呂誠吉という伯父が、「華僑中学に進学したら、政治活動に参加するな」と忠告してくれていた。私の小学校の最後の2年間は成績が良く、先輩の援助は必要なかったため、彼らの申し出を断った。もし、身内の老人から、特別に忠告を受けてなかったら、あの時代に生まれた私は、おそらくそういった活動に参加していたであろう。

私は、1963年に入学してから1968年に卒業するまで、6年間、華僑中学に在籍していた。華僑中学のキャンパスは非常に広く、バスケットボール・コートも多かった。私は、ほとんど一日中学校にいた。例えば、午後授業がある日は、午前中にバスケットボールや卓球をしていた。体育教師から学校代表のメンバーとして抜擢されたこともあり、1965年には華僑中学のバスケットボールとバレーボールの学校代表のメンバーになった。バレーボールでは、華僑中学は強豪であり、常に全国優勝に輝いていた。後には、国家代表のメンバーおよび主将の多くが、華僑中学出身者で占められるようになり、私の数名の同級生も国家代表メンバーとなった。しかし、私たちの年代では、全国中学校バレーボール選手権大会では、華僑中学の優勝は叶わず、私たちは大きなショックを受け、恥ずかしく感じて、コーチや監督に顔向けできない気持ちでいっぱいであった。

このほか、私は陸上競技でも良い成績を残した。中学2年時の全校運動会では、同級生が私の知らない間に私の名前で申し込みをしていた。当時、学校では、いくつかの組に分かれて競技が行なわれており、高等部の1年と2年は甲組、中等部の3年と4年が乙組、中等部の1年と2年が丙組であった。私は丙組に入って競技に出場したが、運動会の当日まで一度も練習をしない状況の下、当日になってから参加を知らされ、当日いくつかの競技で走った。ハードル競技では1位、2百メートル短距離走では3位、百メートル短距離走では5位、2百メートル団体リレーでは私たちの班が2位となり、あわせて4つのメダルを得ることができた。家に持ち帰ると、父はたいそう喜んでくれた。

3. 文芸活動

私の華僑中学での6年間は、私に影響を与えた一生における最も重要な歳月だった。私は普段、読書や書作が好きだった。中学3年生の年、私は、15～16歳で、初めて、ドイツの詩人であるハイネの『ハイネ詩選』を読み、中国語に訳した。これによって詩が好きになり、詩作を試み始めた。華僑中学の図書館には、豊富な蔵書があり、私は頻繁にそれらを借りていた。学校の多くの教師、例えば、苗秀、丘絮絮、李汝琳は、名の知られた作家であり、私はよく、彼らの作品も借りて読んだ。これらの作品は、私にとってためになるものばかりだった。中学3年生から4年生にかけての時には、学生の刊行物に作品を発表していた。1967年の最終学年の時、私は初めての作品である「火中の詩」を『星洲日報』（訳者注：当時のシンガポールで主流の中国語の新聞）の青年文芸版にて正式に発表した。青年文芸版は、基本的に公開されているもので、シンガポールで活躍する文筆家が常に投稿するコーナーであった。

基本的に、私は文系の成績は良い方で、高等部2年生の年に、私は中文学会の主席になり、壁新聞の編集責任者となった。華僑中学の中文学会は何年もの間、活動を休止しており、私の代になってから、活動が再開されたのであった。以前は政治的な流れが左寄りであったため、学校は、生徒が壁新聞を利用して政治的な宣伝活動を行なうことを恐れて、壁新聞を禁止していた。私が主席になった時に、私たちの中文学会は学校に要求し、校長はついに壁新聞を張ることに同意してくれた。当時、私は壁新聞の編集責任者となり、2人の同級生が編集を手伝ってくれた。このほかに、レイアウトのグループ、清書をするグループ、インタビューのグループもあった。

当時の華僑中学の校長は、鄭安崙であった。中文学会の成立式で、鄭校長と学校の中国語の教師が、祝辞を述べてくれ、私たちを励ましてくれた。私たちは、広く会員を募集し、華僑中学で文芸活動を繰り広げた。同級生の何人もが、現在、著名な文筆家になっている。

華僑中学は、シンガポールの名門校であり、鄭安崙校長と、その前任の薛永黍校長は、ともに金門出身者であった。薛永黍校長は、約20年間校長を務め、鄭安崙校長もまた20年余り校長を務めた。鄭安崙校長には、4人の娘がおり、そのうちの1人は、現在、華僑中学理事会で理事を務めている。薛永黍校長の子女もみな高い教育を受け、良い生活を送っており、一人は中華レストランの経営者となった。

私たちの高等部には、クラスが2つあり、1つは経済クラス、1つは数学クラスであった。私は、経済クラスで学んだ。クラスメートの中には、高等部を卒業し国外に出た者以外で、国内の大学に進学した者は、経済を学び、卒業後、商売をしたり、商務に従事したりする者が多数であった。私は、文学に興味があったので、卒業後は、南洋大学の中文学科に進学することにした。

私は、1969年に大学に入学した。入学前に、既に1冊の本を出版していたため、大学入学時には、他人とは違うといった感覚があった。学生たちも、「中文学科に大作家がいる」といった噂を小耳にはさんでいた。中文学科の同級生の大部分は、書作が好きな人たちであった。私は、大学入学後すぐに、学校の中文学会に入り、副会長となった。会長は1学年上の女子学生で、彼女は私によくしてくれた。彼女は、後に、更に高い学位を得るために、台湾に渡った。2年目は、私は引き続き、会に在籍して、会長となった。

大学1年生の時、学校の中文学会に入って、文芸活動を行なうほかに、中文学科内の活動にも参加した。学科には、『北斗』と呼ばれる文芸刊行物があり、私は編集者の1人となった。『北斗』はあわせて3期出版された。2年生の時も、私は『北斗』の編集を担当し、同時に、中文学会の年刊の編集も担当した。中文学会の年刊は、主に孔孟思想について書かれたものが多かった。その年の年刊では、私は、「1970年のシンガポールの詩壇」を書き下ろして、1970年の1年間にシンガポールで出版された詩集を紹介した。これは、比較的学術性の高い文章であった。中文学会の後援で、その年には、全校小説コンクールも開催された。同時に、「早雷」という刊行物の編集にも携わった。この刊行物は、学校の不合理な制度に対する学生の生の声を反映したものであったため、この刊行物は、学校当局からは歓迎されるものではなかったはずだ。

私は、3年生になってから、静かに落ち着きたいと強く思うようになった。グループの活動にも関わりたくなくなり、率先して『北斗』の編集グループから降りた。この刊行物は、他のグループの学生によって引き継がれたが、彼らは『北斗』を出版することはなく、『新生』という名に変えられた。『新生』という名は、比較的積極性がある、またリベラルなものであると考えられたからだ。私は、静かに落ち着いて勉強をしたいと思ったものの、暇になることはなかった。大学3年生の時、南大仏教学会が、私が学生のグループ活動に参加していないことを知って、仏教学の年刊である『貝葉』の編集責任者になってほしいと依頼してきた。あまりの熱心さに断りきれず、私は、やむなく無理をして、その刊行物の編集作業を引き継いだ。私は、第6期の編集責任者となったが、この仏教学の刊行物は、かなり学術性のある文章から成っていた。文学作品もあったが、すべてが「仏教」と関係するものであった。

4. 社会に入って

1972年、私は、大学を卒業してすぐに兵役に就いた。兵役は2年半であった。台湾南部で訓練を受けたこともあったが、それは一般に「星光部隊」と呼ばれた。台湾に到着した日は、ちょうど私の誕生日であったために、感じるものがあって、「還郷」という詩を書いたことを覚えている。

1975年に退役してからは、職探しに奔走した。1976年、人民協会が記者を募集した。人民協会は、半官半民の機構であり、傘下の機構が全国各地に分布している。シンガポールの選挙区に基づいて、地区が分けられているが、1つの選挙区に、少なくとも1つの民衆聯絡所と呼ばれる機構が設立され、文化、体育、教育などの諸活動の推進、多民族的な民族の活動の主催を担っていた。その目的は、社会の安定を促進することであった。各民衆聯絡所には、管理委員会があり、それは経営者たちや地域のリーダーから成っていた。彼らには、給与は支給されず、完全なボランティアであった。基本的には、民衆聯絡所の管理委員会主席および重要な幹部は、すべて裕福な会社経営者であり、私の同郷人である方水金（筆者注：シンガポール人で金門出身の著名な企業家）も、かつてこのような事をしてきた。

私が人民協会に採用された要因は、おそらく、当時の私は既に何冊もの本を出版しており、文壇では少なからず名前が知られていたこと、次に、私の英語が聞く能力、話す能力、

書く能力ともに使えるとみなされたことであつたと思う。3つ目の要因として、面接時の3人の面接官の1人が、華僑中学を卒業した大先輩であり、おそらく同窓生ということも関係していたのであろうと思われた。どちらにせよ、私は最終的に採用されることになった。

最初は、記者として採用され、試用期間は2年であつた。しかし、私は、1年余りそれをしてただけで、編集の鍾君という人が他所に栄転したために、私は編集代理として抜擢された。実際には、当時、私よりも経験豊富な記者が大勢いたが、上層部は彼らを重用せず、駆け出し記者である私を抜擢したのであつた。おそらく、仕事に対する評価に加えて、学生時代に刊行物の編集経験があつたことで、最終的には私が編集代理として抜擢されたのであろうと思われた。数ヵ月後、某著名出版社が、私を引き抜こうとして、当時の給与の4割増を申し出てきたが、正直いってかなりの高額であつた。私は、この機構に就職したばかりであること、試用期間でもあること、また昇進したばかりであることを考慮して、申し出を受け入れなかつた。後に、上司がこれを知り、その年は、私の国外での交流活動を積極的に推薦してくれた。1978年、私とほかの30名あまりの青年が、シンガポール代表として、東南アジア青年の船という計画に参加することになった。あわせて2ヶ月間、東南アジア各国と日本を周遊したが、それは非常に貴重な経験の1つとなっている。

後に、時勢の変化にともなつて、中国語を読む人が次第に少なくなり、新しい潮流にあわせる形で、機関の刊行物である『民衆報』も、中国語と英語の2言語記載に変更された。中国語の記者は中国語の文章を書き、編集部の英語の記者が、それを英語に翻訳する作業をした。一方、英語の記者は英語の文章を書き、私たちが中国語に翻訳する作業に従事した。基本的に、記者の仕事であっても編集の仕事であっても、多少なりとも翻訳作業にも関わらなければならなかつた。

編集の仕事についていえば、機関の刊行物の業務のほかに、人民協会が常に国外または地元の他の機関と、中国語による文書のやり取りをする際の業務にも及んでいた。理事長は、公務で多忙なために、私に代筆を依頼した。彼は、私を信頼しており、時には文書を見ないまま、秘書に直接印鑑を押して投函するように指示したりしていた。このようなこともあり、かえって私は責任の重大さを感じて、更に慎重に代筆をした。

編集、副出版主任、そして出版主任という段階を経るうちに、私は撮影が好きになった。編集上の必要性によって、時には写真の選別作業にも関わつた。1つの場面であっても、異なる角度によって異なる効果が得られる。この仕事に長く関わつて、写真を選別する力が磨かれた。また、撮影の角度の重要さも、撮影時の背景の取り入れ方もわかるようになり、気づかないうちに、私の撮影に対する興味が深まっていた。

2005年、その年に私は55歳となり、人生は短くも苦しくもあることを感じて、多忙な公職から離れたくなり、仕事を辞めて執筆活動に従事することにした。退職前に一度、別の部署の事務局に2年半、異動になっていた。そこは、主に社会や民衆の声を聞いて、とりまとめる業務をするところであつた。17名のメンバーは政府の官僚であり、リーダーは政務部長の曾士生であつた。

5. 島嶼文化社

書作は私の趣味であり、早い時期では、華文中学在学時代に、中文学会の主席を務め、書作を好む生徒たちとともに、華文中学で文芸活動を展開していた。卒業後、私は当時の同好の生徒たちとともに、正式に島嶼文化社を設立して、文芸の仕事を繰り広げた。その期間、私は何度か会長を務めたが、初めの頃は、華僑中学の同窓会のような雰囲気があった。後に、私たちは、他校の卒業生である文芸愛好者にも門を広げた。1970年代の島嶼文化社は、非常に活動的で、短編小説の創作コンクールを主催したり、全国時事論文コンクールを開催したりするなど、外にも活動を企画したりしていたほか、2期の『島嶼季刊』も発行した。

島嶼文化社の最も意義のある活動は、インドネシアの作家仲間のために、多くの本を出版したことである。島嶼文化社は、合計して30冊あまりの本を出版したが、その中でインドネシアの作家仲間のもものが十数冊含まれており、それは、総出版数の約4割を占めている。島嶼文化社は、非営利団体であり、私たちが本を出すのは営利のためではなかった。多くの時間を使って、私たちは作家仲間のために資金を集めて本を印刷した。かつて、インドネシアで中国語が禁止されていた時代、中国語による書籍の出版は厳禁であった。同郷人である黄東平（訳者注：インドネシア華人で、著名な華文作家）は、かつて島嶼出版社の名で本を出した際に、私たちは彼の出版費用の一部を集めた。具体的には、李氏基金や芸術総会などといった団体に援助を求めたりして、作者の負担を軽減した。

インドネシアの作家仲間の出版に力を貸すことについてであるが、もし、本のページ数が多くなく薄い本になった場合は、10年前のシンガポールでは千ドル（訳者注：日本円で約8万円）で出版することができた。私たちは、李氏基金会に出向き、費用の援助を求めた。不足分は約5百ドルほどだったので、私と数人の仲間が百ドルずつ出して解決した。こういった作業は私たちがすべて行っていたために、当時の島嶼文化社は、インドネシアの作家仲間にありがたがられていた。インドネシアの作家仲間は、あの辛い時代、本を出版する方法もなかったために、私たちの島嶼文化社が、彼らのために本のISBNコードを申請し、資金を募り、印刷会社を探して、彼らを助けてきたのである。

後に、インドネシアの状況は、かつてほど厳しくなくなり、彼らはインドネシアで隠れて印刷することができるようになったが、出版社名は、なおもシンガポールの島嶼文化社の名を使って出版していた。私からの唯一の条件は、政治および宗教に言及したものであってはならないことであった。インドネシアでは、政府に不満を述べたり宗教を批判したりしてはならず、内容さえ問題なければ、島嶼文化社は必ず支援をした。

スハルト大統領が1998年に失脚し、インドネシアにおける中国語も基本的には解禁となったが、インドネシアの作家仲間の中には、経済的に余裕がなく、外に経費の援助を求める必要があったために、私たちはなおも資金を募って、シンガポールで作品を出版した。

島嶼文化社は、副業的な非営利団体であった。初めに島嶼文化社を立ち上げたのは20歳前後の若者であったが、現在はみな年老いてしまった。シンガポールの団体は、毎年、必ず政府に団体の報告書を提出しなければならず、会の活動の様々な状況を報告することが、忙しいメンバーにとっては大変わずらわしいものとなっていた。数名のリーダーは、島嶼文化社の歴史的任務は終わったと考えて、活動を停止することを決めた。私は非常に辛かっ

たが、その他の理事の大変さを思いやり、また多数の意見を尊重する形で、続けたいとはいえ、2010年1月1日に団体登録を抹消することとなった。しかし、一部の作家仲間および文芸関係者は、やめてしまうのはもったいないということで、私に電子メールを送ってきた。私がリーダーになって、「島嶼文化」を残して、名前を若干変更する形で「島嶼文化芸術協会」にして、島嶼文化社の過去の輝かしい歴史を再現したらどうかと提案してきた。私は、はっきり返答せずに言葉を濁していた。なぜなら、団体を立ち上げるには、熱心さと続けていく努力が必要であったからだ。そして、60歳になってから、団体のリーダーを務めることに精力を傾けることをやめることにした。

6. 「文学回原郷」

私と金門とのつながりは、最も早くは楊樹清（訳者注：台湾の著名作家で、メディア関係者でもある）であった。1980年代後期から1990年代初期にかけて、当時、私は、シンガポール宗郷総会（訳者注：シンガポール華人の同郷および同姓からなる団体をまとめる組織）の仕事にも関わっていた。私は、総会の刊行物に文章を発表した。そのタイトルは「私の知る金門籍の文筆家」であり、文中で十数名の金門籍の作家を紹介した。当時、私は、総会の刊行物である『源』の編集責任者を務めており、その文章は『源』にて発表された。この文章を、台湾の鏢鵬程教授が目にし、彼はこの文章を台湾に持ち帰り、金門出身者である楊樹清に渡した。

楊樹清は、この文章に目を通した後、1990代の初期に、映画監督の董振良とともに、シンガポールの映画祭への出席のついでに、私を訪ねてきた。彼は、何度も私が家に電話をかけてきた。当時、私は携帯電話を持っておらず、夜7、8時に帰宅した際に、妻から楊樹清と名乗る人物から何度も連絡があったと聞き、私はすぐさま電話で彼と連絡を取り、翌日、邱少華、馬田、方然、芋華といった数名の文芸関係者を誘って、当時のスタンフォード国家図書館の外にあるレストランで面会した。このようにして彼と知り合ったのである。

後に、楊樹清は、『金門学報』という雑誌の出版を計画し、私も何編かの文章を書いたが、2～3期の出版をただけにとどまった。その後すぐに、楊樹清は、私に2人の同郷人である、詩人の張国治と画家の呂坤和を紹介してくれ、私は彼らと文通をすることになった。2000年8月に、私が『金門系列』という詩集を出版した際には、張国治が序文を、呂坤和が表紙のデザインをしてくれた。彼らはまた、特別に、シンガポールに1週間来てくれて、本の発表式に参加してくれた。当日の夜、同時に座談会も開催し、彼ら2人のほかに、地元の画家である翁享祝も招待した。詩人の方然がメインスピーチを、黄美芬が司会を務めてくれた。その知らせを1週間前に発送したが、本の発表式当日は、金門会館の大講堂が人で埋め尽くされ、「満員」と言っているほどだった。これらの活動は成功を収めた。こういったにぎやかさは、シンガポールではなかなか見られることなく、私は皆の応援と支援にいたく感謝をした。

2002年、張国治の推薦によって、私たち夫婦は、「金門詩酒文化祭」に招待されることになり、帰郷することになった。私も方然夫妻を推薦して一緒に帰郷した。これが私の初めての金門への帰郷であり、父が亡くなって1ヶ月余りの時のことであった。その前に、私は、楊樹清に私の散文集である『文学回原郷』の序文を、また張国治に表紙のデザイン

を、呂坤和にページ内のデザインを依頼した。私は、この本を金門に持ち帰って発表した。これについて、後に、皆が、また楊樹清が、そしてインドネシアの李金昌が、ともによく口にするようになった「文学回原郷（文学は帰郷する）」活動である。

私は、5歳で故郷を離れて、南のシンガポールに移った。故郷に対する思いはみな、詩句を通して表現した。楊樹清が私に言った言葉は、「南洋にいる金門籍の作家の中で、原籍地への感情がもっとも強い1人である」だった。故郷に戻ってから、私は、初めて帰郷した時の感触を「古厝」という数首の詩に詠んだ。張萱萱は、「グローバル化と現地化の潮流が吹き荒れる中で、文芸創作の砂の道のあちこちに寒風が吹いている。寒川は、清風の中の一本の清らかな川のようにあり、また逆流して進んでいる。現地の色彩にあふれた詩歌を数多く創作し、さらに積極的に故郷の金門と関連する詩歌を創作し、“文学回原郷”の宿願を実現している。同時に、金門の同郷組織や文芸圏内のいかなる編集活動にも全力を傾けている」と述べている。私のことを知る上述の張国治、楊樹清、張萱萱の数名には、本当に感謝している。

2008年、私は3回、帰郷の機会があった。5月に、私は、シンガポール金門会館の帰郷親族訪問活動に参加して、妻と一緒に帰郷した。本来は10月に、国立技術学院が開催した「金門高峰論壇」の招待を受けて参加する予定であり、航空券も購入していたが、台風によってキャンセルとなった。「金門高峰論壇」は12月下旬に延期されて開催され、国立技術学院が航空券、ホテルおよび食事を提供してくれた。その時の帰郷では、多くの昔からの友人に会うことができ、また新しい友人もできた。私は、一日前に母方の2番目の叔父の家に泊めてもらった。旅館のような快適さや便利さはなかったが、親戚との交流を深めることができ、高齢者たちと一緒に過ごす機会も更に増えて、私は親戚の家に泊まることの良さをあらためて感じた。

7. 親戚との情、故郷への情、友情

私は、仕事の関係から、休暇は多くはなかった。休みになれば、私は文芸が趣味であったので、文芸活動があればまず参加していた。そして、妻の実家がインドネシアなので、長期休暇ができれば、私は妻に付き添ってインドネシアに行っていた。よって、2002年以前は、私は金門に帰郷したことはなかった。父と母は、存命中、頻繁に帰郷しており、毎回の帰郷にはいつも妹が付き添っていた。父親の3兄弟は、一緒に金門に帰郷したこともあったが、唯一の心残りは、私が父に付き添って金門に帰郷したことがなかったことである。当時は、いつも多くの理由があった。父が2002年に他界して、ただただ残念な気持ちが残ってしまった。よって、早期退職した後は、まず、母の外出、金門への帰郷、インドネシアの親戚訪問に、より多く付き添う計画を立てた。2009年、私は、母や妹らに付き添って、祖父母の姉妹である大伯母に会いに、ジャカルタへ行った。また、2010年10月には、母に付き添って金門に帰郷した。

私には2人の息子がおり、ともに私の母校の華僑中学を卒業した。華僑中学は、伝統的な華文学校であり、私は当初、子どもには、中華の文化、伝統、価値観を重視するこの学校で学んでほしいと思っていたが、華僑中学は名門校であり、シンガポールの全国統一試験で上位3%に入らなければ、申請資格が得られなかった。私の長男は、勉強ができる方

で、小さい頃から成績は良く、特に数学に秀でており、かつて数学オリンピックの国家チームのメンバーになったことがあった。当時、華僑中学は独立運営校であったために、生徒は毎月150シンガポールドルを納付しなければならなかったが、他の普通の公立学校なら、たった数ドルでよかった。しかし、成績が良い生徒は、政府から奨学金が得られたために、一律で数ドル納付するだけでよかった。華僑中学を卒業後、彼は、トップレベルのラッフルズ・ジュニア・カレッジに入学することに決めた。彼は、そこを卒業してから、政府の公共サービス委員会の教育奨学金を得て、2004年に更に高い学位を目指すためにフランスに留学した。2006年に帰国してから、修士学位を取得して、母校のラッフルズ・ジュニア・カレッジにて教鞭を執っている。

次男は、生まれながらによく動く子であった。華僑中学、そして、華中ジュニア・カレッジを卒業後、武装部隊（海軍）の奨学金を得て、イギリスのニューカッスルの大学にて海事工学を学び、第1等荣誉学位を取得して帰国し、現在は、海軍の後方部門でエンジニアをしている。軍の階級は大尉である。

私は、旅行が好きだったが、ヨーロッパに行きたいと思ったことはなかった。後に、2人の子どもがともにヨーロッパに留学した。彼らは2歳違いである。私が早期退職した年は、ちょうど長男の卒業の年であった。私と妻は、飛行機で彼の卒業式に向かった。私たちがヨーロッパに向かった際、まずは、オランダのアムステルダムに飛び、そこからフランスへ向かった。その後、イギリスの次男を訪ねた。次男は1ヶ月の長期休暇を使って、ニューカッスルを案内してくれた。その後、スペインのバルセロナに飛び、そして、パリの長男の卒業式に出席してから、パリの観光もした。

翌年は、次男の卒業年だったので、私たち夫婦はまた、彼の卒業式に出席した。その年は、ちょうどサッカーの世界カップが開催されたために、ヨーロッパへの航空券が一枚千七百シンガポールドルというように、1年前と比べてほぼ倍に値上がりしていた。出費が痛かったが、行かないわけにはいかなかった。息子は、舞台上で多くの賞を受賞し、私と妻をほっとさせてくれた。息子は、私たちを連れて、イタリア全土を案内してくれた。どちらにしても、私たちは上述したいくつかのヨーロッパの国を旅行する機会が得られた。これも息子たちのおかげによる旅行だった。

父方の1番上の伯父は、2007年に他界した。享年92歳であった。彼には4人の子どもがおり、現在、3番目の息子がブリトゥンに残っているだけで、他の3人はみなジャカルタで出世した。2番目の伯父である呂誠対は、シンガポールに住んでいる。彼は、かつて雇われて貨物を船に乗せて、ペカンバル（Pekan Baru）、ベンカリス（Bengkalis）などといったインドネシアの都市をまわっていた。後に、苦力にもなった。しかし、彼は、私の父よりも多く教育を受けており、新聞も読め、株の購入やゴールドの投資方法も知っていた。ペカンバルという地には、多くの金門出身者がおり、前県長の李炷烽が、かつて彼らに、金門同郷会を組織することを勧めてきたこともあった。ペカンバルは、インドネシアのリアウ省の省都であり、スマトラ島の中南部に位置している。

私は、持ち前の客好きのため、友人がシンガポールに来たら、面識があろうと無かろうと、いつも手を抜かずに対応していた。私に電話があれば、どんなに忙しくても、時間を作って会いに行ったり、食事をともにしたりしていた。面識のないインドネシアの作家に対しても、このように応対しており、偉そうにしていると感じられたくはなかった。面識

のない作家仲間たちは、私の友人の紹介によって、または私の名前を知っていて会ってみたいという理由で連絡をしてきた。私はいつも、あることを思い出していた。かつて中国に行った時、氷心（訳者注：中国の著名な詩人、作家、翻訳家、児童文学家。中国民主促進会中央名誉主席、中国文聯副主席、中国作家協会名誉主席および顧問、中国翻訳工作者協会名誉理事などを務めたこともある）に会う機会があり、本当にうれしく思ったものであり、誰かがシンガポールに来て、私に会いたいと申し出てきたら、私も同じようにしたいと思ったのである。ちょうど、その頃、スマトラ北部のアスハン（Asahan）の無忌という作家が、初めて私を訪ねてきて、電話で「4、5分だけでいいから会いたい。一緒に写真を撮ってもらえるとありがたい」と言ってきた。私はいたく感動し、それで、多忙であったが時間を作って、会いに行った。以前、人民協会の出版部門で働いていた時は、仕事は比較的自由であった。午前10時から正式に仕事が始まったので、こういった友人を朝食に招待して、一緒に点心や肉骨茶（訳者注：シンガポールの福建系の料理）を食べたりしてから、仕事に向かうことができた。

私が最初にインドネシアを訪れたのは1971年であり、父方の従兄の結婚式に参加するためであった。1980年に、インドネシアの女性と結婚したことを契機に、妻の里帰りに頻繁に同行するようになった。毎回、インドネシアを訪れるたびに、多くの中国語の書籍を持参した。当時、インドネシアでは、中国語が厳しく制限されており、多くの渡航者は、そのようなリスクを犯そうとはしなかった。しかし、私は、インドネシア華人の作家仲間にとって、中国語の書籍が非常に重要なものであり、また、心の支えでもあると考えて、毎回中国語の書籍をインドネシアに「密輸」していた。黄東平（訳者注：著名なインドネシア華人作家）は、1980年代に『香港文学』にて、寒川のことを「インドネシア華文文芸の功労者」と記した。

正直に言えば、私は物怖じしない性格で、過去30年間のインドネシアへの渡航で、インドネシアに運び込んだ書籍は非常に多かった。中には箱に詰めて別送したものもあり、1箱ずつ詰めて、1度に百数冊ほど運んでいた。シンガポールから渡航するビジネスマンに託けたことも何度かあった。インドネシアが中国語の書籍の輸入を禁止していた30年余りの間、毎回の渡航のたびに、事前に誰にどの本を渡すかというリストを作成して、持込の方法を考えた。

10年前に、中国語が解禁になると、インドネシアの作家仲間は大変喜んで、彼ら自身も公明正大に中国語の書籍を持ち込むことができるようになり、私の中国語の書籍の持ち込みも、問題なくなった。私は、毎回、インドネシアの親戚や作家仲間を訪問するたびに、親戚にはシンガポールの特産物を、文芸界の仲間、特に親しい仲間には3～5冊ほど、普通の作家仲間には1冊、本を手土産として贈った。このほか、インドネシアの作家仲間が作品をシンガポールで発表したり、彼らが国外での文学セミナーや文芸活動に出席したりするために、推薦もしてきた。1970～1980年代、私は、黄東平、シシリア、ロミオ・鄭の3氏（訳者注：3名ともにインドネシア華人で、現地では著名な作家、詩人）と知り合い、彼ら3名を世界華文作家会議への参加者として推薦した。彼らがインドネシアを出て、東南アジア、そして世界において活躍できるように力を貸したのである。

当時、私の友人であるシンガポールの国際テレビ局の李栄徳、詩人の周維介、マレーシアの作家の莊延波が、インドネシアの作家と知り合いたいということで、仲介をしたこと

があった。それによって、インドネシアに行くなら寒川に依頼すれば問題ないと語られるようになっていた。これは、当然私のことを買いかぶっている言葉だといえる。ここ数年、インドネシアのスマトラ北部で商売をしている数名が、私の仲介によって、シンガポールにあるブキティマ海南聯誼会に資金援助を行ってくれた。

ある人からは、インドネシアの教育について知りたいという依頼を受けたこともあり、それについても助力した。私は、インドネシアの教育についてはさほど詳しくなかったが、仲介をすることはできた。それで、私は、インドネシア華文作家協会会長の袁霓に依頼して、教育界の人物の紹介をしてもらった。少し力を貸すだけで、問題は解決できた。2004年、インドネシア華文作家協会が盛大な文芸活動を開催した際に、私は、インドネシアの華文文学推進に対する貢献賞を授与された。2010年12月にも、私はまた、インドネシア華文文学への関心と支持に感謝されて、感謝状が贈られた。

インドネシアの華文文学推進に対する貢献賞ならびに感謝状の授与と、1998年に台北で開催された第3回世界華文作家大会での私の発言とは、大きな関係があるといえる。あの大会で、私は、リスクを顧みず、同年5月にインドネシアで発生した暴動によって、焼かれたり犯されたり殺されたりしたインドネシアの華人たちのために、インドネシアの排華暴動を厳しく批判したのである。事前に、世界華文作家大会秘書長の符兆祥が、私に対して出席とこの発言を要請していたが、私にはためらいがあった。しかし、同じ言語を話す同じ民族である華人が悲惨な迫害に遭ったということを考えると、良心から、身を挺してでもあの罪状を批判する必要があると思えた。私は、今そのことを振り返り、一切の後悔はなく、正しい行動をしたと思っている。私は、インドネシアの親戚、作家仲間たちが遭遇した知る限りの事実を、当日「淌血的五月」と題して5千～6千字の文章にして読み上げた。それで、その場に出席していた2百余名余りの世界各地の作家、教授、編集者などが共感してくれた。それをきっかけに、世界の華文作家たちが、国連人権委員会に対して、インドネシア政府がインドネシア華人の公民権、生命、財産を保障することを要求する動きに至ったのである。

退職後の私は、2007年以降、シンガポール教育部の計画による学校配属の作家となった。これは、教育部が、優秀な作家を、文芸に興味のある生徒の指導に当たらせるという計画である。私は、この学校配属作家の依頼を引き受け、現在に至っている。私は、生徒たちが書作をすること、勇気を持って投稿することを勧めている。そして、彼らには、もし採択されなくても、彼らの文章が悪いからではない。出版社と合っていない可能性もあるために、投稿をする際には、まずは出版社の性質を理解してから、合う出版社に投稿したほうが掲載される機会が高くなるとアドバイスをしている。当然、文章がうまく書けていなければならず、そのためには努力が必要であり、多く読んで多く書くことは必須であるとも。

付録：

(1) 呂紀葆（寒川）の著作および詩集

『火中の詩』（詩集、藍平昌との共著、1968年）

『紅睡蓮』（詩集、1970年）

『山崗的腳步』（散文、小説、謝水凝との共著、1971年）

『島嶼五人詩集』（詩集、謝氷凝との共著、1974年）
『在矮樹下』（詩集、1975年）
『樹的氣候』（詩集、1979年）
『銀河系列』（詩集、1990年）
『山山皆秀色』（詩集、梁鍼および思思との共著、1992年）
『寒川文芸評論集』（評論、1992年）
『寒川文芸縦横談』（エッセー、1995年）
『雲樹山水間』（旅行記、1997年）
『從新加坡到日本』（旅行記、1998年）
『金門系列』（詩集、2000年）
『文学回原郷』（文集、2002年）
『古厝』（詩集、2005年）
『我從金門來』（文集、2006年）
『金門鄉僑訪談録—新加坡篇』（文集、2009年）

(2) 呂紀葆（寒川）の詩

「那年的鄉愁」
「抉抉」
「童年.金門」
「随意篇」
「為歷史的過錯.悲歌」
「回郷（之一）」
「回僑（之二）」
「山崗散草」（2009/1/8）
「父親」
「文学金門縁」
「終於還郷」（「金門詩酒文化節記録」2002年11月出版に掲載）
「在華中的日子」（2009/12/28）
「千島與我」（2007/11/10）
「吾將上下而求索」（聯合早報2005/4/28）
「淌血的五月」（聯合早報1998/8/20）

(3) 呂紀葆（寒川）に関する文章

- * 黄东平：「印華文芸の功臣」
- * 袁霓（インドネシア華文作家協会会長）：「我所認識的寒川」（2005/5/15ジャカルタにて詠まれる）
- * インドネシアの石志民：「患難見真情」（2004/7/18）
- * メダンの暁星：「我與寒川」
- * インドネシアの暁星：「永志印華史冊的功臣—寒川——從印華作協成立十周年想起」
- * 趙琬儀：「本地詩人寒川——偷運華文火種到印尼」

- * ブルネイの一凡：「古道熱腸説寒川」
- * 楊樹清：「原郷與異郷：南洋の金門籍作家」
- * 伍木：「離散與回郷——解讀寒川詩中的原郷情懐和文化郷愁」
- * 張萱萱（シンガポール国立大学中文学科）：「析論寒川詩歌的原郷情結——飄泊的心游走在金門僑的另一端」

(4) 呂紀葆（寒川）の主な詩4首（原文のまま）

* 桂河橋
正午的陽光
把嘆息的桂河橋
瘦成
水面上浮動的
一片牆

瘦，正如当年
飢饉的戰俘
在鉄蹄下
把生命，筑成長長的
鉄路一条

而我走過，沈重地
每一步，都踏出
木軌道上
幽靈的鳴咽

注：桂河橋と「死亡鉄道」について。第2次世界大戦期間中にこの鉄道建設のために多くの捕虜が命を落としたことを詠んだ詩。

* 古厝
二舅盖了大房子
古厝依然在秋夜里沈睡
「你爸每次還郷
我们総愛在夜里納涼
剥花生，飲高粱
倦了，就倒在这簡陋的庭院里
醉眼看星星」
二舅回憶說
「你爸走了？」
二舅一臉茫然
後悔年頭

没下南洋
古厝没有夢
院子里有父親回鄉的
歡樂，在二舅的
記憶里

注：父が他界した際に、父を思う叔父の気持ちを知って、それを詠んだ詩。

* 胡姬花
那年三月
在万紫千红的胡姬花園
攝影師把一對新人的儷影
芸術性地捕捉，然後呈現
一張又一張的
愛情

轉眼已是十年
孩子們当然不会明白
為什麼爸爸，在植物園
老是对着胡姬花
遲遲不走開

或許，我們都是愛花人
十年前是如此
十年後也是如此
如果還有什麼快樂的事
那一定是帶着孩子
回到從前看花的地方
看滿園的胡姬
如何前緣未尽
如何頻頻揮手
等待我們的
歸來

注：10年前の今日、ジャカルタでの妻との結婚の際の、蘭の花が咲き乱れる公園での撮影を思い出して(23-3-1990)

* 孩子篇
(一)
打你時

你哭
妻子問
你愛誰
爸爸還是媽媽
你拉長着声音
說：
爸爸

(二)
孩子
当你把小脚伸入
我的鞋里
我憂慮的是
你也走着
和我一樣的
道路

(三)
大兒子，像我
他的弟弟，像妻
我說：妻呵
我們別無財產
這樣的分配
最公平
(5-11-1985)